

北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

開拓編

第20回、開拓風景①

平岸へ

北海道への移住を決めた水沢家臣ら家族を含む二百余名の大集団は、明治4年3月、三班に分かれて渡道することになります。水沢市史によれば、このような大集団が水沢を出発することはかつてなかったことで、見送りの船場では親類はじめ大勢の見送りを受け、後ろ髪をひかれる想いで先祖代々の土地を離れました。彼らの服装は、股引、

脚絆、風呂敷、編笠、足袋、草鞋に刀を腰に差し、ちょんまげ姿であったそうです。このとき17才で移住に加わっていた金山セイさんは、昭和10年80才で病没されましたが、亡くなる前年に、平岸下本村農業実行組合の方が、移住当時の話を記録されており、平岸小学校の開校80周年記念誌「郷土誌ひらぎし」に収録されています。それによりますと、一行は北上川を川船で石巻まで下り、そこで大船に乗り換え、海路函館に向かいました。函館からは陸路で駒ヶ岳山麓の森町砂原まで出て、そこから船で室蘭へ渡り、あとは幌別、白老、勇払、千歳に一泊し、漁(患庭)を経て札幌へ入りました(図1)。漁にのみ休む家が建っていました。あとは山道ばかりで人家もなかったそうです。六人家族のものに馬一頭を荷付用としてつけられ、歩けないものも馬に乗りました。当時、札幌本道(今の国道36号線)はまだできていませんでしたが、江戸時代に幕府が整備した道路と宿場があり、馬はそこで借りたものと思われます。結局、水沢を出てから20日余りをかけ、惨憺たる苦勞の末、平岸にたどり着きます。

移住当初の様子

移住当時、平岸にはまだ家が建っておらず、平岸3条9丁目に作られた三棟の仮の長屋に共同で入居しました。前回書いたように、当初の計画では苗穂に入植する予定となっていたので、移住当初は平岸から苗穂まで弁当を持って開墾に出かけていましたが、結局この土地は札幌市街から近すぎるという理由で取り消され、平岸を開拓することになります。移住当時9才だった松井新四郎さんが明治31年に「北海道毎日新聞」に語った話によりますと、移住当初開拓地がなかなか決まらず、何もすることがないので、父親と弟を連れて大きな水の音がするところへ行ってみようということになり、鎌や斧を持って出かけ、大木をかき分け、やっこの思いで崖を降りて豊平川(今の精進川のこと、当時は豊平川の分流だった。詳しくは自然史編第6回参照)まで下ると、

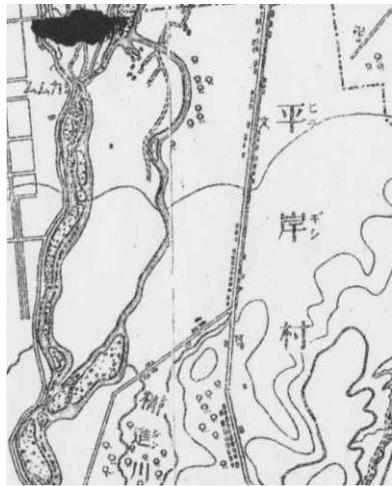


図2. 明治29年平岸村近郊地図

川の中は水の底が見えないほど大きな気味の悪い魚がうようよ泳いでいるのが見えました。松井さんは大喜びで、手に持っていた鎌でその魚をひっかけ、20匹も釣り(?)あげて、大骨折って持って帰り、皆に見せると、鱈という魚だと言って皆で鎌を持って取りに行き、そのうち鎌などでは面白くないというので、国から持ってきた麻糸を出し合って大きな網を作り、網で大量に取りはじめました。その頃は、一軒に20本や30本鮭が軒先に下がっていない家はなかったそうです。



図1. 平岸への移住ルート

開拓風景

開拓使は、今の平岸街道を切り開き、入植者のために官給の家を建て、その家の側の木だけ切ってくれました。家屋の用材はすべてひのきであり、南部(岩手県)で切り込んだものをわざわざ船で篠路まで運搬し、そこから馬で引張って建てました。家は、屋根も周囲もみな木の板で、床は板の上におしろを敷いていました。屋根はまさ屋根といって、長さ30cm程度の薄い板を屋根に拭いて仕上げた木の板屋根で、その上に石をのっけていました。

このころの平岸を写した写真が北海道大学の北方資料館に残されています(図3)。平岸3条16丁目(長専寺のあたり)から北側を写したもので、今の平岸通と国道453号線が二股に分かれているあたりです。家の大きさと比較して何倍もの高さがある原始林がうっそうと生い茂っており、前述の金山さんによれば、この大木に遮られ天日さえはつきりと拝めなかつたほどだったそうです。道の真ん中の黒い曲がりくねったところは、ちょうどこの辺りに湧き水があつてそれが小流れになったものです。湧き水は、今の北交ハイヤーのある辺りから湧いており、このころは蓮の花が一面に咲く池になっていました。

参考資料 水沢市史第3巻、水沢市史刊行会

郷土誌ひらぎし、平岸小学校開校80周年記念祝賀協

平岸百拾年、『平岸百拾年』編集委員会

平岸村、澤田誠一

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

【編集後記】

おかげさまで、3月24日の北海道新聞朝刊にこの連載が取り上げられました。平岸の歴史というテーマを通じて、地域に貢献したいとの思いでこの連載を続けてまいりましたが、少しずつ受け入れられてきたと感じています。今後、ミニコミ紙や講演活動などで平岸の情報発信に努めてまいりたいと思いますので、ご愛顧のほどよろしく願っています。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ。金沢大学理学部地球

学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭

に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

Tel: 0120-128-348

Fax: 0120-128-358

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしています



図3. 平岸開拓風景(北海道大学北方資料館蔵)